

## 第二話 穂高と水と仏教の心

藤森正法

安曇野は私の故郷です。私はある小さいお寺に生まれ育ちました。これから昔を思い出しつつ「穂高と水と仏教の心」と題して、安曇野の自然と人の気質、安曇野の家屋構造と排水処理、安曇野の人の心と仏教の心についてお話し致します。

### 安曇野の自然と人の気質

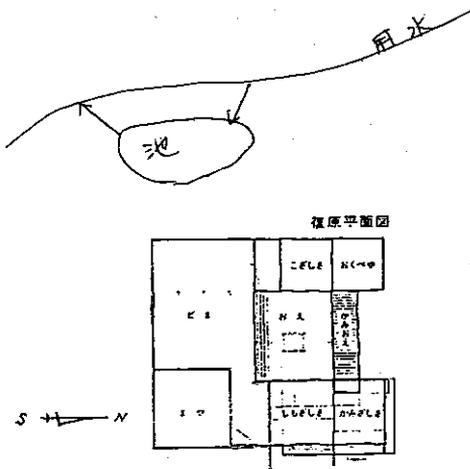
長野県特に安曇平は、春夏秋冬、四季の順行が極めてはっきりとしていまして、内陸的気候から朝夕の寒暖の差は大変なものです。安曇野は、松本を始点に大町あたりまで延長約四十キロメートル位。この辺り一帯が安曇野と呼ばれる地域です。雪は比較的少ないのですが、真冬は零下二十度位になります。ですから大変寒い所です。こうした自然環境は人間を勤勉にし、頭脳を明晰にするようです。四囲には白雪をいだけく峻嶺が横たわっています。その景観は人々を瞑想的にし思索的にし、何かを求めてやまぬ理想家肌にしたと思いま

す。また盆地や山谷によってわかたれた地勢は、歴史的条件とあいまって、人々を誇らしい気分させました。以上が県歌「信濃の国」に「古来山河の秀でたる国は偉人のある習い」と謳われた理由だと思えます。長野県人が集まりますと、この歌を十番位まで唱います。こうした信州人氣質、県民性は、どちらかといえば清濁合わせ飲む包容力を必要とするような政治家、軍人、実業家には向かないようです。むしろ、その個性、理論的知性、批判精神、感受性や創造性、あるいは理想追求や使命感等は、学者、教育者、ジャーナリスト、宗教家、そして芸術家に向くようです。山川出版の長野県の歴史にも「中世に著名な禅僧を輩出したのはその一例であるが、近代以降特にその感があり、各界第一線の人材は豊富だが、それぞれの統率者の器量の者がいないのは、我々としては峻峰そびえ連なる信州の山容の如し。」と書かれています。私も同じような印象を持っています。

## 安曇野の家屋構造と排水処理

安曇野一帯は、北アルプスの雪解け水を用永に引き、山の流出土砂で出来た扇状地に成り立つ水田地帯です。中房川より引き込まれた用永は、村の斜面を音を立てて流れ下っています。村人達は、この水を水稲に配水し、飲用にも供しているため、汚さず大事に使っていました。

曾根原家は、昔の庄屋で、この安曇野に三百数十年の歴史



図一 曾根原家の間取り平面図

を持つ旧家です。この屋敷は昭和四十八年に国の重要文化財に指定されました。平入り本棟造り系統の民家で、県下最古のものの一つです。当時の民家は藁屋根がほとんどで、棟を高く上げられず、細長い形状でした。また、内部は座敷がなく、土間と板の間でした。ところが曾根原家は本棟造りで大変大きい家屋になっていました。間取りの平面図は図一の通りです。私が曾根原家当代の当主に下水と風呂の位置を尋ねたところ、こんな答が返ってきました。

「正確にはどこにあったのか分かりません。馬屋に瓶があり、東側の外から用が足せるようになっていたことを記憶しています。上座敷に客がある時は、一時的に上便所、上風呂を置きました。台所は、恐らく土間の西北の隅だったと思います。そこから西二十メートルあまりの所に池がありました。だから多分台所は西北隅だったと思われれます。台所の排水は、西の外側の吸い込み穴に吸わせました。この辺りは砂利層で吸い込みは容易でした。」

飲み水については次のような答えでした。

「アルプスの雪解け水の中房川から用水路を通して引き、さらにそこから自宅敷地内の池に導水しました。その池から台所の外の瓶に汲み込んで使いました。ドラム缶八分目位で、大家族一日分でした。風呂水もこの池から運びました。池は降雨時の濁りの沈澱に効果的だし、流れている所から

汲むよりも作業が簡単だという利点がありました。昭和二十年代にチフスが発生した時は、上流で用水路を止めて、池の入り口を閉め、石灰をまきました。昭和三十年までこうして池の水を飲用にも使っていました。』

この付近は穂高の扇状地で、地下水は十五から二十メートル掘らないと出て来ません。ですから井戸の使用は難しく、流水を使っていました。ここから四キロメートルあまり下流の山葵田のある辺りは、扇状地の先端なので、一、二メートルも掘れば水が出て来ます。その付近では井戸水を飲用に使っていました。

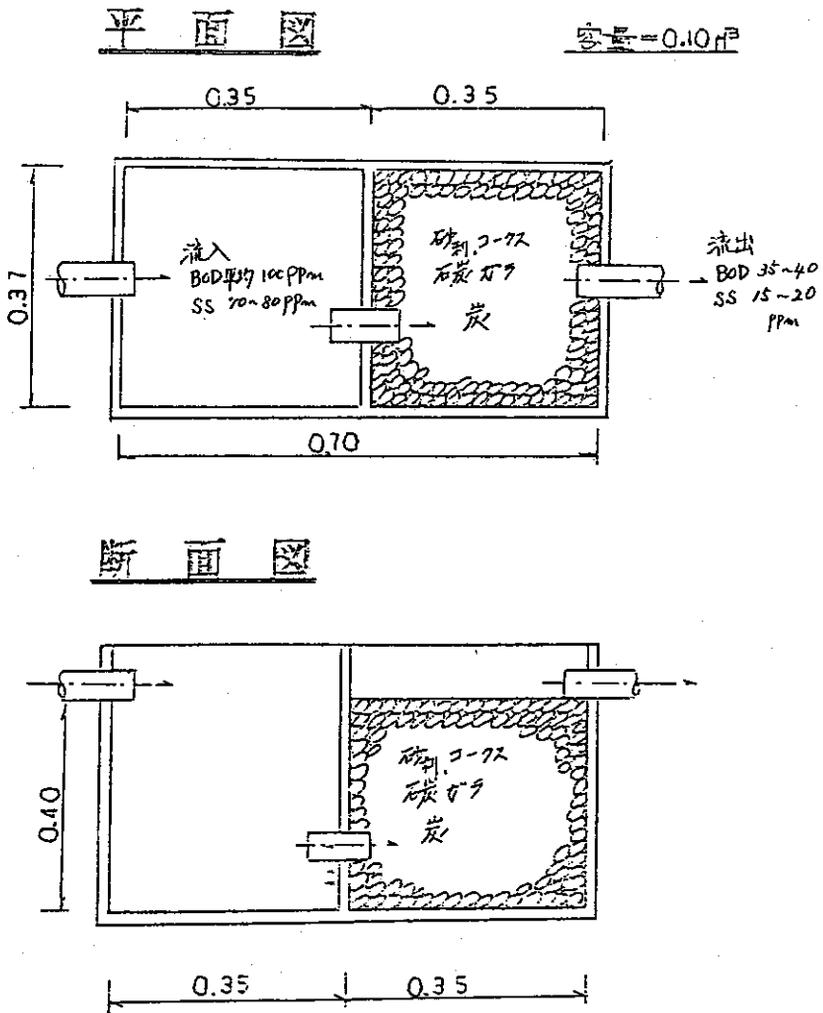
曾根原家の当主は、昭和三十年までは用水の水は綺麗で、飲めたと言っています。その理由は水を守る様々な工夫や習慣があつて、村人がかたくなに守ってきたからです。例えば米の研ぎ汁や野菜屑等是为了、屋敷内の菜園に入れていたし、糞尿や馬の踏み糞等は畑の重要な肥料として、一切捨てる事を禁じられていたのです。ところが昭和三十年から三十一年にかけて、村に水道が引かれました。この時から水量に使われるようになり、排水は吸い込み穴を溢れて用水に流入し始めました。

住民は、最初気が付かず、むしろ文化生活に拍手を送ったわけです。ところが昭和四十五年頃から稲の倒状や収量低下に見舞われ、下流では山葵の炭入れ病の発生、虹鱒の死亡事

件等が起こるようになりました。こうして村人は原因究明に立ち上がりました。曾根原家がある辺りは有明村と言いましたが、昭和三十三年に四町村が合併して穂高町になりました。昭和四十七、八年の町の人口は一万九千八百人、年間予算は十九億円弱でした。調査の結果、原因は用水の汚濁であることが明らかになりました。住民が騒ぎ出したので、役場も調査に乗り出しました。二百五、六十回にも及ぶ集会の末に、町民が一致して決めたことは、全戸に穂高式ミニ下水道を普及させることでした。昭和五十年から五十九年まで九年の歳月をかけて、十九億円の費用が投入され、ミニ下水道百パーセント普及を達成しました。この施設は、BODベースで流入水質百ppmを三十五から四十ppmに、SSベースで七十から八十ppmを十五から二十ppmに落とすことが出来ます。構造は、図一に示すようなもので、大変簡単な浄化槽です。このような対策が講じられた結果、稲の収量も徐々に昔に戻りつつあるようです。以上は、一九八九年一月に聞き取った結果です。穂高町の昭和六十三年の人口は二万六千人、年間予算は五十億円で、十五年あまりの間に人口、予算規模共に随分拡大しています。

ともかく家庭雑排水、風呂の排水を先程の施設に通すわけです。尿尿は汲み取りで別に処理します。

島田さんという方が役場のミニ下水道の推進者でした。彼



図一 2 家庭排水町補助対象浄化槽基本型

は、後に戸別浄化槽から出る汚泥の処理を行う穂高町生活排水処理センターの場長を勤めました。現在は保健衛生課長です。島田さんは、ミニ下水道の推進当時を振り返って、住民の方々から次のようなことを学んだと言っています。

- (一) 住民は、ギリギリの所まで来れば、自ずから立ち上がるものであること。
  - (二) 立ち上がった時のエネルギーは物凄いものであること。
  - (三) 住民自らも負担するものであること。
- 負担の内容は次の通りです。
- (ア) 穂高式下水道は各戸五万円の負担。
  - (イ) 浄化槽負担金各戸二〜二万五千元（内町補助七千元）
  - (ウ) 維持管理費（汚泥引き抜き、木炭袋洗浄等）毎月各戸八百円

しかし、穂高町にも水洗化の波が押し寄せ、尿尿浄化槽が増え続けています。毎年二百基から三百基だそうで、既に全部で千五百基になるそうです。そこで今後は、農村集落下水道、小規模下水道、特定環境保全公共下水道を導入し、本格的な下水道を設置する方向で検討が続けられているようです。つまり、静かな安曇野のたぐずまいの中にも近代化の波は押し寄せ、水を汚すまいとする工夫が消え、都会並みの下水道に切り換えられようとしているのです。

## 安曇野の人の心と仏教の心

さて、次にいろいろな文献を引きつつ、安曇野の人の心に埋め込まれている仏教の心を探ってみたいと思います。

『仏教』について広辞苑には次のように書かれています。『世界的大宗教の一つ、前五世紀初めにインドのガンジス河中流地方に興った。仏陀釈迦牟尼の説法に基づき、人間の苦悩解決の道を教える。修業に専心する出家教団の他に、在家信者達も多かった。阿育王の入信によって、インド全土から国外へも広がり、一世紀頃から東アジア諸方に及んで現在に至り、最近では欧米にも知られている。既に、インドに於て大乘、小乗の区分が生じたが、中国や日本では風土的特色を生かした種々の宗派が発生した。』

次に安曇野に沢山ある『道祖神』は、次のように書かれています。『道路の悪霊を防いで行人を守護する神。日本では、「さいの神」、「さえの神」と習合されてきた。くなどの神（久那斗神、岐神）、たむけの神（手向神）』

また、『善光寺信仰』に関しては、『長野県には、安曇野と少しかけ離れるが、中世全国に普及した善光寺信仰がある。善光寺は本来無宗派であり、その信仰の本領は加持祈禱による現世利益を求めるのでなく、阿弥陀如来の衆生救済度の誓願にあずかって、極楽往生出来ると後生の安心を求めるところ

にあった。その点、極楽往生のために、念仏という他力本願の易行を説いた。鎌倉新興仏教の念仏諸宗派と通ずるものがあった。善光寺普及にあづかつて最も力のあったのは、踊躍歎喜の念仏踊りで知られる時宗の徒一遍上人である。』  
さらに中世、信州から輩出した禅僧は次の通りです。

法澄国師 心地覚心 (一一〇六一九八)

大明国師 無関普門 (一一一三〇九一)

南院国師 規菴祖円 (一一六一一三三)

関山国師 関山慧玄 (一一七七一三六〇)

此山妙在 (一一五九一三七七)

性海霊見 (一一一五〇九六)

伯元清禅 (一一三六八一四三八)

天与清啓、古雲智云 (一一四三八一八八)

玉陰英輿 (一一四三一五二四)

仁如集堯 (一一四八三一五七四)

法澄国師は安曇野から出た人です。それ以外に木曾や伊那のような谷筋からも輩出しています。これら人材を生んだ理由を、本人の素質もさることながら信州の風土に求めている所に私は興味を覚えます。

さて、明治以降の著作の中から幾つか安曇野の人々の心を知ることが出来ると思われる部分を紹介します。

最初は、東洋のロタンと言われた萩原守衛。彼は号を碌山

と言いますが、三十二歳で短い生涯を閉じた薄幸の彫刻家です。信州大学の仁科惇先生がこの人の生涯を『碌山・三十二歳の生涯』という本に書いています。その冒頭に次のような一節があります。

『山紫水明の地という。萩原守衛の生地穂高は、まさに安曇野のただ中であって、その名にふさわしい。西には常念岳を中心に、北アルプスの山々が連なり、その狭間から流れ下る水は、錯綜してこのあたりで信濃川上流の犀川となる。一部の水は、北アルプスによって形成された扇状地をくぐりぬけ、東の扇端部に湧きだし、ゆったりした清浄な流れとなる。生家の東を北に流れる万水川（まみづがわ）の名称は、その由縁をよく語っている。しかし、自然は人ともにもあることによって意味をもち、価値となる。自然の中に何を見出すか、それを生かすも殺すも人間だ、ということである。』

白井吉見の『安曇野』の次の一節も興味深いと思います。

『松本からの乗合馬車を三枚橋でおおりて、糸魚川街道の家並を東にぬける、広い田んぼの向こうに白壁のまじった矢原耕地が一目で見える。矢原の左が白金、更に等々力とつらなつて、安曇野では一段と低い地域である。上高地から発する梓川は、この東方で高瀬川を合わせ犀川となって北流する。穂高の村を流れる二つの川即ち万水川と穂高川はここで高瀬川に合流する。安曇野の川という川、水という水がごとごとく

この地域に集まってくる。地下にかくれた山の清水も、ここ  
で地上に姿を見せ、山葵畑にそそいで、豊に流れる。

守衛の家は、矢原耕地のほぼ中央にある。村では中位の自  
作兼小地主で、藁ぶきの母屋のほかに土蔵が一つ。西の表口  
から裏まで土間が貫いていて、入口の脇が既になっている。  
養蚕期には広いおえから上りはなの土間まで蚕の飼ひ場にな  
った。表庭に面した一間幅も土間で、収穫ときには稲を積  
みこんでおき、暗くなるとここで稲こきをするならわしに  
なっている。」

『安曇野』の作家臼井も礫山と同じ様な気持ちを持って  
いたのだと思います。安曇野は穂高川や犀川、梓川が集まって  
いる地域ですから、特にそうなのでしょう。安曇野、特にそ  
の中心である穂高は、水が豊富であると同時に、どの流れも  
濁りを知らぬ清流でありました。この清流は、どこから湧い  
てどこへ去るのか、方丈記で読むまでもなく、人間の生死、  
人間の苦悩、人生観を深く考えさせる水です。一方、滔々と  
流れくる清流をじっと見詰めていると、人間の希望、光明、  
平和の源泉、自然界の神秘を感じ、「神います」と悟らしめた  
と私は思うのです。

臼井は、礫山に「愛は芸術なり、芸術は苦闘なり」（ラフ・  
イズ・アート、アート・イズ・ストラグル）と言わせていま  
す。この中にも穂高の川と山々を背景とした宗教心を感じま

す。

礫山は、自然、人格、信仰といったことは、いずれも人間  
存在の根源にかかわるものであり、その総体を「プリミティ  
ブなもの」と称しています。礫山は、安曇野の生んだ芸術家  
でありますが、仏教家ではありません。しかし、その作品は  
安曇野の人々の精神が支柱となつていると思います。私は、  
この意味で彼が「プリミティブなもの」と感じた総体が作品  
に反映していると思います。

水や自然は、仏教の嫌う事象の対立的捕捉、エゴイズム、  
差別には無頓着で、自我やものが空であることを教え、唯識  
の中にこそ人の生きる道を悟しています。ここで唯識とは、  
全ての存在、事象は、心の本体である「識」の働きによつて  
仮に現れたものであるということなのです。即ち、自然賛美は、  
涅槃の境地であることを示していると考えます。私は、自然  
賛美が即ち仏教の心であると考えています。

宗教評論家のひろさちや氏は、「物事を差別としてとらえ  
る。その差別の心を不可としている。」と述べています。ま  
た、大岡信氏は、「折々のうた」の中で、「世の中はみなほと  
けなりおしなべていづれの物とわくぞはかなき」（花山院）と  
いう歌を紹介した後、次のように書いています。「この世は、  
そのまま真如の仏の世界であるはずなのに、人はみな、これ  
はこれ、あれはあれと差別に執着する。はかない事よ。」

## 討 論

北川 藤森さんの郷土愛を強く感じました。お話の中に「水を汚すまいとする工夫が消え、都会並の下水道に切り換えられようとしている」という部分がありました。ここに現行下水道システムに対する評価が出ています。しかし、住民が英知を働かせて、対策を立てたのだから、本来ならそれを更に発展させて新しいシステムをつくり出して行くべきだと思ふのです。この点、私は論旨が一貫していないような気がします。それから仏教は差別を嫌ったのかどうか疑問があります。差別ではないかもしれませんが、何かあつたように思ふのですが。

藤森 私は、多分釈迦の教えとして差別を嫌っていたと思ひます。また、ひろ・さちや氏は、中道が仏教の教えだと言っています。

私は安曇野を離れて久しいので、忘れた部分も多いのですが、昭和三十四年頃までは居りました。当時は学校の帰りなど、直接川から水を飲んだものでした。ところが曾根原さんの話にもあるように、水道が出来て豊富に水を使うようになってから川は汚れてきました。便利さを追ひ掛けるようになったんですね。水洗化が増えているのも都会の波です。私も都会に馴染んで、汲み取り便所を嫌だと思ふ気持ちがあ

かにあります。しかし、便利さをあまり追ひ掛けるのもどんなものでしょうか。島田さんは、やはり三つの方式の下水道をやらないといけなくなりそうだと書いています。現実的に浄化槽が増えてきているわけです。その現実に立てば、仕方無いというのが素直な気持ちなんでしょうね。私は、島田さんの本當の気持ちは違ふと思ひますが、一方で島田さんの言われることも分かるんです。だから北川さんの言われる通りだと思ひますが、時代の流れと言つてしまふべきなのか、釈然としなない面があります。

稲場 穂高式ミニ下水道が通常の下水道に変わらざるを得なかつた理由は何だつたのですか。

藤森 穂高町七千五百戸の内、現在專業農家は三割もないのです。しかも年々減つてゐるわけです。こうなると尿尿処分は、汲み取りか尿尿浄化槽に頼ざるを得ないわけです。これが大きな理由ではないかと思ひます。それから、生活雑排水戸別沈澱槽の維持管理の経費と手間が馬鹿にならないという点です。そこで結局、公共下水道が有利だといふ結論になつたようですね。しかし、ミニ下水道が失敗だつたといふわけではありません。生活雑排水処理はそれなりに有効だつたんです。ところが何しろ尿尿浄化槽が増えて、問題が出てきたわけです。だから何とかしなければならぬ。

石丸 私は、お話から仏教より神道の世界との関連をより強

く感じました。安曇というのはもともと海洋民族で、それが山間に入ってきた。だから安曇野には仏教以前の日本古来の習俗や考え方、自然観が残っているのではないかと考えます。稲場 私も同感です。日本では仏教は神道と習合しているわけです。「山川草木悉皆成仏」と言った感じですね。この辺の感覚と仏教がどう結び付くのか、問題でしょうね。

藤森 安曇野には随分行者が多いのです。山岳地帯で修業しているようです。私の寺にも同じ敷地とおぼしき所に、かたやお宮があり、かたやお寺があります。私も小さい頃、仏教と神道がさほど違ったものとは考えなかつたのです。安曇野はそうした風土ですね。

多田 日本の仏教は真言密教以前と以後で全く異質という感じを持っています。現世利益と結び付いた密教は大変土俗的だったと思います。現在の仏教と昔のそれとでは大変異質で、昔はもっとエネルギー的なものだったのに違いありません。因果応報とか輪廻、巡り巡って結局自分の所に戻って来るといふところから、中道というのが出て来る。この辺りが重要なのではないでしょうか。

熊井 「易行」は親鸞が説いたわけです。彼によって関東にもこの説教は入っていますが、善光寺の協力もあつたようです。易行では妻帯も許すわけです。親鸞は、大変迫害を受けますが、善光寺はその親鸞より前から易行に近い教えを説い

たということですね。

藤森 親鸞は流された越後から関東に移住する道すがら善光寺を参拝したという説があります。だから彼と善光寺とは何等かの関係があつたと想像出来ますね。

西村 「自然を生かすも殺すも人間だ。」という点、同感ですが、それではそこからどうするのか。これが私達の統一課題ですね。

谷口 大変面白く、いろいろ思うことがあるのですが、整理がつかないですね。藤森さんの家はお寺ですが、勤行をする時など今でも齋戒沐浴をされるのですか。

藤森 最近は、しませんね。

谷口 水はケガレを落として聖となる儀式に重要な役割を果たしますね。今のように入浴方式が日本で最初に出来たのはお寺です。それが室町時代に民衆にお風呂を提供するようになり、江戸時代に宗教を離れて日常化するわけです。私は仏教もケガレを嫌うものと理解しているわけです。ケガレが抽象化して不純を嫌うようになる。近代化以前は宗教の本音と人間の生活が本音で結び付いていたところがあると思うのです。ところが近代化とともに建前が出て来て、本音と建前を使い分けるようになってきた。このような建前と本音の乖離が問題ですね。仏教にも差別があつて、糾弾されています。このことも乖離の結果ではないかと思えます。

藤森 行者の人達は、私の寺の井戸で体を清めています。しかし、私は彼等は自身の修業のためにやっていると感じています。

谷口 私は、ケガレが蔓延して来たのであるならば、徹底してケガレの中に踏み込み、究明すれば、その奥に綺麗なものが見えてくるように思います。今こそケガレを徹底して追求することが私達のやるべきことではないかと考えます。

福田 東京のような場合、現在の下水道のシステムが無批判に議論されることなく受け入れられた。ところが穂高町では何百回と話し合い、しかも住民の方、個々に身の回りのケガレを確認されている。そこから出発して、ミニ下水道システムが出来た。ですから大都市と違ったシステムが出来ること、もまた当然と言えます。私は、穂高町のシステムがたどるであろう将来に期待を繋ぎたいという気持ちです。

それから宗教と科学の乖離という事がありました。私は必ずしもそうとも思えない。宗教は科学的でなかったか、これはまだ仮説ですが、そのようにも思えるわけです。風土と時代で宗教も科学もいろいろと変形するのではないか。そんな感想を持ちました。

多田 宗教と科学とについては私も同感です。昔は、宗教は一つの科学だったのではないかと思います。